

令和7年度 中学生の「税についての作文」

縁税務署長賞

時代を映す鏡としての税

横浜市立鶴志田中学校 第三学年 島原 未来



形にで現れると思います。

むかひん実際には、利用時間を誰がどう記録するかなど課題は多い。それでも「わざわざ」の発想として考えると、今の生活や社会の姿が税を通して浮かび上がる。昔の「わざ税」や「醤油税」が時代の価値観を映していくように、私が提案した「トジタル時間税」も現代のことと並んで思つ。

今年の夏休み、家族とスーパー銭湯に行ったときに、入湯税という見慣れない文字を見つめた。大人は一律百五十円と書いてあり、入館料とは別に支払う仕組みになっていた。普段から消費税や所得税とこの言葉はよく耳にするが入湯税というものがあるとは知らなかつた。調べてみると温泉地の環境保護や観光施設の整備に使われていることが分かつた。お風呂好きの日本人らしい税だと感じ、興味が広がつた。

せりふ歴史を調べると、「わざと変わった税」にも出合つた。ヨーロッパには「ヒゲ税」、アイルランドには「ポートチップス税」、日本は江戸時代に「醤油税」があつた。一見おかしな税金に思えるがその背景には当時の社会や文化が反映されてくる。税とはお金を集めるだけなく、その時代の政治家が描いた理想の社会像を示す「鏡」だと気づいた。

そこで私は考えた。今の日本で新しい税を導入できぬとしたら何がよいか。現代社会ではスマートフォンが欠かせないが、依存や健康被害の問題もある。私自身も気付くとのこのを見続けてしまつことがある。だからこそ「トジタル時間税」を考えてみたい。一日一定時間を超えてオンラインゲームやSNSを利用すると追加課税され、その税収を教育支援や地域活動に使つのだ。単なる罰金ではなく、社会全体の健康増進につながる

税というと取られる、払うだけのものと思つがちだがその使い道を知り、自分なりどんな社会を実現したいかを考えると、未来をつくるための道具のようだ。今回の調べを通して、税は国のただけではなく、暮らしを守り豊かにするために存在してこむじとも分かつた。私たちが安心して生活できる道路や公共施設、福祉や医療も税があるから成り立つている。当たり前だと思つてゐる日常が多くの人の税金によって守られていくことを知つた今は、税=取られるものではなく「未来への投資」と捉えらるつことが大切だと思つ。

夏休みに銭湯で入湯税を知つた小さな体験は、私にとって税を身近に感じらるきっかけとなつた。これから大人になり、働いて税を納める立場になつた時、ただ義務として払うのではなく社会をよりよくするための参加の一つの形であると意識したい。

